

平成 28 年度 第 2 回高知市総合教育会議 議事録 (要約版)

- 1 日 時 平成29年 1 月24日 (火)
開会：午後 3 時30分 閉会：午後 5 時00分
- 2 開催場所 たかじょう庁舎 6 階大会議室
- 3 出席者
- | | | |
|------------|------------------|--------|
| (構成員) | 高知市長 | 岡崎 誠也 |
| | 高知市教育委員会 教育長 | 横田 寿生 |
| | 委 員 | 谷 智子 |
| | 委 員 | 西森 やよい |
| | 委 員 | 野並 誠二 |
| | 委 員 | 森田 美佐 |
| (市長事務局) | | |
| | 高知市副市長 | 吉岡 章 |
| (教育委員会事務局) | | |
| | 教育次長 | 土居 英一 |
| | 教育次長 | 橋本 和明 |
| | ほか関係所課 | |
| (事務局) | 総務部長 | 山本 正篤 |
| | 総務部副部長 | 谷脇 禎哉 |
| | 総務部総合政策課長 | 西成 英丈 |
| | 総務部総合政策課文化振興担当係長 | 岡宗 裕美 |
- 4 議 題 次期学習指導要領の方向性について
(1) これまでの学習指導要領等改訂の経緯及び 2030 年の社会と子どもたちの未来
(2) これからの学習指導のポイント
- 5 議事の経過
- 開会
 - 次期学習指導要領の方向性について
 - (1) これまでの学習指導要領等改訂の経緯及び 2030 年の社会と子どもたちの未来について、教育委員会事務局から資料 4 - 1 ~ 4 - 8 に沿って説明 (PPT)

○ 議論

(岡崎市長)

今回の学習指導要領の方向性がまとめられ、動き出したということで、これを基本方針として、いかにして地域の教育に落とし込んでいくかということについてご意見をいただき、議論としたい。

近年文科省は、アクティブ・ラーニング＝「能動的な授業、児童生徒自身が考える授業」という方向で動いているが、このような概念が出てくると、「授業」という言葉自体が当てはまらなくなってくる。

(谷委員)

学習指導要領をしっかり勉強し咀嚼して、高知らしさ、高知市はこのように教育をやっていくのだというものが必要。その意味で、教育大綱の基本理念が、この学習指導要領の内容とつながっているし、また、それに基づく取組が、学習指導要領のめざすものを達成するということで、うまくいくのではないかと捉えている。防災教育や安全教育、人権教育、主権者教育など、高知市が重視しているものを、次期学習指導要領の下での取組として、どのように進めていくかが大事。

(西森委員)

資料4-7の機械化し、なくなる職業を見ていて、人として生きることを突き詰めて考える時代になるのではないかという気がした。機械にできること・できないこと、人としてできること・できないことを考えるということ。また、いわゆる機械的な作業・仕事が機械によってなされるようになると、もう一段人間が人間として生きられるようになる。

人が生きるということは、自分なりに豊かだと思える人生を送ること、また、それが他者にも豊かである社会が実現されることであり、極端には、機械に労働を委ねることによって得られた経済的利潤から、生活するための最低限のものを社会全体に分配できるようになれば、労働や雇用によらず、ある程度文化的な活動に専念できる日が来るかもしれない。人が人としてこの社会を良くしたい、何が全体を幸せにするのかということ突き詰めて考えるシステムを創る、どうしたら機械と共存しながら社会全体を良くしていけるか、そういうことを考える人間をつくっていくことが大事であり、より良い社会を創っていこうとする発想を持つことが重要だと思う。

(岡崎市長)

人工知能はどんどん進んでいるが、本質は統計学によるもので、人間のところまで追いつくのはなかなか難しい。

そういう意味で、機械では超えられないものがあり、子どもたち一人ひとりの個性と、「土佐の子どもに受け継がれる土佐のDNA」、「高知らしさ」を、その方向で、教育に落とし込んでいかなければならない。

(野並委員)

子どもたちのグローバル化という言葉について、グローバル化＝アメリカ

スタンダードとなると、適切かどうかという疑問がある。

グローバル化という言葉を使うのであれば、ベースの部分がどこにあるのかをちゃんと持たなければならない。グローバル化に向かうためには、ツールとしての英語の必要性もあるが、日本人であるとか土佐人であるとかいうベースをしっかりと持っていないと、世界に打って出られない部分がある。そこを強調して、教育の中で、高知市・高知県の子どもたちに知ってもらうことが大事。この文化を持って世界へ挑戦する、そういう素地を十代のうちに築いてもらいたい。

(森田委員)

子どもたちが自分はどう生きていきたいかが明確になることが大事。自分がどういう風に生きていきたいのか、将来どんな風になりたいのか、逆に、どんな人生は嫌なのか、そういうことに気付いた時に、今までやってきた何を知っているのかという、目的だったものを手段として、どう生きていきたいかというのを問いかけていく。そして、今の社会をいい意味で疑ってみる、新しいものを作れるだろうかと思いを膨らませることが一番大事なことだと思う。子どもたちの将来の生き方、子どもたちが納得した人生を生きられるために、教育がやっていくことが必要。

また、アクティブ・ラーニングの話では、今後、教科横断的に、横のつながりで勉強できることがたくさん出てくると思う。

(横田教育長)

人は、必要とされることがとても大切だと思っている。一人ひとりにとって、それが幸福と感じられるかどうかの入口なのではないかと。こういう風潮では、必要とされないことが多くなり、子どもたちにとって生きにくい時代を迎えているが、教えられる側ばかりではなくて、教える側にとっても、何をどう身に付けさせるのかということは、なかなか難しい。しかし、教える側も見直しをして、教えられる側が、自分が必要とされていると感じられるようなものを多く身に付けさせるために、これまでと違う何をしなければいけないのかを考えなければいけない。

(岡崎市長)

高校の時、英語の授業で、先生が「Knowledge & Wisdom」という本の話をした。いわゆる「知識と知恵」で、どんなに知識を得ても、それを活用する知恵がないといかすことができないが、その知恵も、知識の積立てがないとそこにはつながらない。これは、永遠のテーマだと思う。

今回の学習指導要領で言うと、将来的にどう生きていきたいのかを、子どもたちが当然自分で考えていかなければならないが、それがうまくつながっていくのかどうか、それには、教える側の意識改革もかなり必要。日本語で「授業」というのは「授け与える」、上からの押し付け型の学習が「授業」で、この「授業」がそれでいいのかどうか疑ってみるということを、教える側として考えていかなければならない。アメリカではディベートやディスカッションをよくやるが、日本の子どもたちは、そういった訓練が足りていないと思う。今

度の学習指導要領は、そこに一步踏み込んだという雰囲気はある。ただ、そこには、教える側がそのマトリックスを踏まえて、授業の中で溶かし込んでいくという過程があり、大変難しい。教える側は、いろいろな勉強会や研究会などでしっかり議論し、授業に落とし込んでいかないといけないと思う。

(野並委員)

グローバル＝アメリカ標準ということでは、医療分野でもアメリカ的なものの考え方をどんどん入れていく流れがある。しかし、例えば、ディベートは、アメリカ社会という構造の中で、生きるためには相手を叩き潰すというのがベースにあり、負けたらおしまいという考え方を持つ人々のトレーニングなのであって、日本人が日本人の文化の中でそれを採り入れるのか、それがグローバル化なのだろうかと思う。和をもって尊しとする日本人の文化をどこまで保っていくのか、押し付けられてアメリカナイズされていくのが正しいのか。教育の世界でもアメリカ的なものを採り入れていくという流れがあるのだろうか。先ほどのディベートの話などは、そういう懸念も感じる。

⇒ (学校教育課)

この度の答申の中では、グローバル化という言葉の説明には言及されていません。ディベート等のお話がありましたが、学校現場では、子どもたちに多様な教育活動が求められており、森田委員さんも言われました、教科を越えた横断的な教育、更には先ほどのディベートのような学級活動など、広く教えていくということが早急に求められているもので、野並委員さんの言われる、グローバル化＝アメリカ標準という強い意識は、現場としてはないと考えます。ただ、子どもたちには、英語などを活用し、国際的に、世界に羽ばたくという視点でのグローバル化という発想は教えていかなければならないので、教員も資質・能力をバランス良く持ち合わせ、子どもたちにどのようなアプローチが必要か、常に考えていかなければならないと考えております

(西森委員)

アクティブ・ラーニングにおいて求められる教員の役割はどのようなものか、例示としてお聞きしたい。

私が高校時代華道部で習った先生は、初日から「自由に活けていい」と言うだけで、訳の分からないまま、必死に挿し、もう駄目だと思って出した作品をサッと手直しする。すごいなと思った。実はそうやっているとお上達する。大学時代の習い方は、「では皆さん、並んで、お花を切り揃えましょう」から始まり、「こうやってこうして斜めにして、合わせて入れましょう」という典型的な授業だった。自分自身最近教壇に立つことがあって思ったが、生徒からの質問をどこからでも来いと受けるのはものすごく怖い。子どもたちに自由に喋らせ思うままに話すのをその場でコーディネートしていく、それはすごいことだろうと思う。現場の全ての教員にこれからそういったことが求められるが、具体的なイメージや、教員がどのように身に付けていくのか、例えば文科省が示しているものなどはあるのか。

⇒ (土居教育次長)

アクティブ・ラーニングという言葉が出てきて一番危惧したのが、「アクティブ」という言葉で、子どもたちが物理的に動いている、目の前で活動している授業がアクティブ・ラーニングだ、という捉え方が出てくることです。文科省が、アクティブ・ラーニングを「主体的・対話的で深い学び」と言い換え出したのもそこだと思います。子どもたちが活動しているとか、元気に手を挙げているとか、対話をしているとか、ディベートをしているとか、そのことだけでアクティブだということになると、先生が出てこない方が子どもたちにとって良い授業だということになりかねませんが、そんなことは絶対にありません。今、文科省は、アクティブというのは、子どもの思考活動、頭の中がどれだけアクティブになっているかだ、ということを行っています。西森委員さんのお話でも、「フリーにやりなさい」と言われた時は、一生懸命自分で考えて実行されていたわけですよ。それがアクティブということで、後のお話の方で言うと、実際に花を活けて、活動はしているようですが、その場合は考えていない、言われたとおりに挿しているだけです。アクティブ・ラーニングをやるには、教える側に強烈な指導力・指導性が必要であろうと思います。

(岡崎市長)

その場合、いろいろな分野で、スーパーバイザーやエグゼクティブチーフなど、指導的な役割を持って働きかけ、一定のレベルまで引き上げていく、そういう立場の方がいるが、教育分野で、教える側でのそういったシステムはどのようになっているのか。

⇒ (土居教育次長)

もちろん研修もありますが、いわゆるスーパーバイザーが各学校を回り、教員に対してそういった指導をします。特に、初任者など若年の教員を中心に回り、基本的なスタンスなども指導しています。現在、学校教育課に3名、また、別の分野で、人権・こども支援課に6名を配置し、担当の学校を回る、又は個々の教員に対して定期的・計画的に入ることによって、教える側のレベルアップを図る取組を展開しています。

○ 次期学習指導要領の方向性について

- (2) これからの学習指導のポイントについて、教育委員会事務局から資料4-9～4-11に沿って説明 (PPT)

○ 議論

(岡崎市長)

特に中学校の数学は、A・Bともに全国平均を7.7ポイント下回っており、数学の応用問題を含め、その展開の仕方が弱いというのが今までの課題になっている。

(森田委員)

先ほどの問題を見ていて思ったことで、アクティブ・ラーニングということ、新しいことをしなければならないということもあるが、基礎的な読み書き・計算力などを外さないということを前提に、実生活での体験というのにも必要だと思う。今までやってきて養った読み書き・計算などの力を外さないのは大前提で、実生活でのアカデミックなことへの気付きや体験を、学校はもちろん、家庭の中で課題を出してみることをきっかけとしてやっていくと良いと思った。

(岡崎市長)

国語の重要性というのはよく言われる。やはり問題について理解できなければ問題を解けないので、文章を解読する・理解するということは、国語がベースになっていて、非常に重要。高知市では、土佐山学舎で試験的に小学校1年生から英語を採り入れているが、今度全国的に授業に入ってくる。それを踏まえ、先日の新聞では、「まだ日本語を十分に理解できていないのに英語を教えてどうする」と言う専門家もおり、そういう見方もあるのだと思った。やはり、日本語、国語の重要性というのは外してはならないということだと思う。

(谷委員)

国語力というのは全ての教科の基礎となるもので、ものすごく大事。学力テストの結果など、徐々に成果が挙がっていると思うが、まだまだ厳しい状況があるということを見据えた時に、子どもたちが毎日大半を過ごすのは授業の時間で、その授業の時間をどのようにしていくかが、学力向上に直結する非常に重要なことだと思う。アクティブ・ラーニングというのは、ただ子どもたちが走り回って活動していればアクティブだ、というのではなくて、思考の活性化、シーンとした中で学習していても一人ひとりの子どもの頭の中は活発に動いているということ。その時、基礎がものすごく大事で、そして、学力テストで言えばB問題のように、考える力を求める問題の学習とのバランスがあって、どちらもやっていかなければならない。魚で例えると、従来の知識だけの学習は、子どもたちに「魚自体を与える」こと。これをもう一歩進めて、子どもたちに「魚の釣り方を学ばせる」、これが学習の仕方を学ばせるということで、いわゆる「生きる力」である。そして、今回は、子どもたちに「魚の釣り方を考えさせる」ということで、そうした思考・学習の過程で身についた子どもの力が、実生活や将来ますます難しくなる課題に直面した時に、課題解決に対応できるような力とならなければいけない。子どもたちに考えさせるということが授業の中でできることが大事。授業は変わらなければいけない。また、授業を変えるということは、各学校が組織的に、一部のできる教員や意欲のある教員だけというのではなく、現場の全ての教員の意識改革を図ることが必要。

(西森委員)

やる気というのはどこから出てくるものなのか、一定の年齢まで同じよう

にやってきた子どもたちの知識量がそれぞれ違うのは、暗記に費やした時間の差よりも知識に対する食欲さなのではないかと思う。全般に知識に対して食欲でない子と、本を読んでも全部覚えてやる、ちょっとでも賢くなってやる、難しい課題を絶対に解けるようになってやるという子がいて、その食欲がある子は、放っておいても吸収していく。それが無い子は、言われたら何となくやるけど、そうでなかったらなぜこれが自分に必要なものなのか分からないままになるのだらうと思う。どうしたらそういう子どもたちに、賢くなりたい、覚えたい、一つでも知識を増やしたいという意欲を持たすことができるのか。それがあれば、放っておいても、どんな環境でも何かを学んでくる。そういうコツのようなものがあれば、教えていただきたい。アクティブ・ラーニングの基礎というのはそこにあるのではないかと思う。

⇒ (土居教育次長)

そこが今回の改訂で一番大きいところだと思っています。資料4-9の三つの柱の三角形の図の一番上に、「学びに向かう力・人間性等」があります。これまでの考え方で言うと、関心・意欲・態度というのは、それまでの生育環境などによって、何らかの形で自然にできているものという感じがあったと思います。しかし、今回は、それを「学びに向かう力」とまで位置付けて、これから身に付けなければならないものの三つの柱としたということは、これを授業で身に付けさせなさいと言っているわけです。この部分については、これまでの学習指導要領とははっきりとスタンスが変わっています。日々の授業の中でどうやっていくのか、これまでは、一つの問題があつてそれを解くためのステップを、先生が順々に説明し答えに行き着く授業を丁寧で指導の行き届いた授業と言っていたのですが、実はこれでは、問題解決の文脈を子ども自身が一切辿っていないわけです。A問題が幾つか単発であるだけの問題で、授業者の方は、それで筋道立った考え方ができていると思っていたのですが、そうではない、やはり、子どもが自らの力でその流れを辿らなければならないということが、今言われていることだと思います。先ほど提示しましたB問題も、質問を順々にするのではなくて、こういう流れを、いずれは子どもたち自身ができるようにするため、(2)を解くためにはどういう文脈が必要で、それをどうやって子どもたちに身に付けさせなければならないのかということが、授業改善のポイントになっていくと思います。簡単には身につかないことですが、日々の授業の中での繰り返しで身に付けさせていかなければならないということが、今回の一番の転換点だと思っています。

(野並委員)

先ほどの谷委員のお話を伺っていて思ったのが、ではどの時点から始めたらいいのだらうということ。小学校・中学校からか、もっと幼い時期からか。そうすると、この構図の中の「学び」を「遊び」に変えてもいいのではないかと思う。そういう原点から学びが最終的にはどこかにつながっていくという議論も必要なのではないか。知るということの喜びは、ある種の快樂で、

陶醉感があって、一つひとつのことが結び付いたと感じるのはものすごく幸せで、その延長がもっと知りたいというところにつながっていると思う。脳科学的に言うと、知ることの快樂をもっと刺激してあげるといいのではないか、そしてその原点は、輪投げの輪が入った、というようなことなのかもしれないと感じた。

(岡崎市長)

保・幼・小連携というのを動かし始めたが、高知市は、公立の幼稚園は一つで、公立・民営の保育園でほとんどの子どもたちを預かっている。貧しいので共稼ぎしないと生活ができないことから、保育園で子どもを預からないといけないということで始まっており、公立幼稚園という歴史がない。遊ぶことによって、考え出すということやコミュニケーションも習っていくので、そういう意味では、高知市は、保育園で、著名な先生方を招いての研修を先行的に充実させ、保育課程の専門家から見てもかなり力を入れてやっていたと思う。保・幼・小のうち、ここでは幼と小しか出ていないが、同列に保育園があって、保育園では、遊びを通じて教えるということがベースとしてあるので、遊びの大切さを保育の課程で確保しているということを経験として、今、保・幼・小と連携してつなげていると考えている。幼稚園の課程ではどうだろうか。

⇒ **(土居教育次長)**

今回の改訂で、資料4-9「三つの柱」の元になるものとして、幼稚園で身に付けること、つなげていくことを明確にしています。そこまでつなげて、改訂に取り組んでおり、一連のものとして捉えるという考え方が色濃く出ています。

(西森委員)

先日教育委員会で示された、これから就学する子どものアンケートの中で、「小学校に入ったら何が楽しみですか」という質問の最も高いパーセンテージの答えが「勉強」だったことが印象的だった。中身もよく分からない「勉強」というのを楽しみにしている、これはすごく大事なことだと思う。それだけやる気のある状態で子どもたちは入学してくる、学校は、そのやる気を1%でも下げない仕掛け作りを何か意識的にしているのだろうか。

⇒ **(土居教育次長)**

子どもたちのスタート、学びに向かう姿勢をつくるのはそこだと思います。小学校の中で、自分はできないとか分からないとか思わせないことが一番大事なところで、そのために、保・幼・小連携の中でアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムというものを作っています。保育園・幼稚園でやってきたことの延長線上に小学校での学びがあって、幼稚園では遊びとしてやってきたのを、「さあ、ここから勉強ですよ」と分けてしまうのではなくて、同じ活動の中に徐々に学ぶということが入ってきて、新しい場面・気付きがあるということが、子どもたちのやる気、勉強に対する意欲を下げさせないということになると考えます。アプローチカリキュラ

ムとスタートカリキュラムは、現在小学校全校と主な幼稚園・保育園に配布し、全市的に展開しています。単にスムーズな入学をスタートさせるということではなく、それがその子の先々の学習のベースになり、更に全体を通して必要な考え方であるということで展開していますが、今回の改訂の狙いも恐らくそこにあるのではないかと思います。

(森田委員)

小学校になって、頑張って勉強して、テストが何点で、何人中何番だとか言われると、自分の能力が数値化されてしまうという感じがあると思う。知ったことによって、誰かを助けられたとか誰かに喜んでもらった、横田教育長が言われた、誰かに必要とされたということ、例えば、自分が知ったことをクラスの分からなかった子に教えてあげて感謝された、算数で勉強したことで買い物に行って計算が合った、そういう、実生活で人の役に立った、自分や誰かが喜んだという体験の積み重ねが大事だと考えると、教室だけでなく実社会でも学びのフィールドを持つ、外へ向けていく仕掛け作りも大事だと思う。

(岡崎市長)

学習指導要領の方向性はこういうものとして示されたので、学校単位で組織的にいかにして取り組むかということが一つの大事なポイントになる。それに関して、事務局から説明を。

⇒ **(学校教育課長)**

来年度から実際に進めていく、学校が組織として動いてほしいこととして、カリキュラム・マネジメントの実施があります。一つの教科だけではなく、横断的に複数の教科で、子どもたちの資質・能力を身に付けていくということについては、一教員だけではなく、学校が組織として、カリキュラム＝教育課程を仕組んでいかなければならないと思います。これについては、これまで若干弱いところがありましたので、来年度、モデル事業として取り組むこととしているところです。幾つかの小・中学校を指定し、計画的な取組をし、小・中連携も含めて、モデル校をしっかりと作り上げ、全市に広げていくということで、これから3年後4年後を見越した計画としています。

もう一つは、県教委や教育研究所を中心とした教職員対象の年次研修ほか、それぞれの研修の中に、こういったカリキュラム・マネジメントの内容を取り込んでいくということを考えております。

(西森委員)

やはり教員が大事。学ぶということを基本的に楽しめる人であるべきだろうと思っている。あの先生は自分でいろいろ研究しているらしい、探究することを夢中になってやっているらしい、そういう人がいることが、子どもにとって、学ぶということを教える一つの例になると思う。教師として二つあって、指導力が素晴らしいという方と、指導はともかくとしても学ぶ姿が素晴らしいという方とがある。仕事に邁進するだけではなく、道楽でもいいの

で、何かを一生懸命に学んでキラキラしているという姿勢を先生が見せる。先生が楽しめると、子どもも楽しいと思う。

(谷委員)

高校で、今度、「総合的な探究の時間」「地理探究」「歴史探究」「古典探究」など、「探究」という言葉の付いた教科ができる。高校教育でそういうことをすごく重視して、大学にもつなげていくという動きがある。高知市は、商業高校にそういう先生がたくさんいると思うので、そういう高校での学習の仕方を大事にしながら、そして、中学校が一層専門的になっていったら、楽しい学校・楽しい授業になる。単純な「楽しい」ではなくて、忍耐なども交えて、子どもがそこに価値を見出すような、そんな授業をする先生が、これからどんどん増えていくのではないかと思う。

(岡崎市長)

以前商業高校に、ボーリングデータを集めている、ちょっとマニアックな先生がいて、我々が最初に高知市内の地盤図を作った時に、ある方がその先生が詳しいから、と連れて来て、そのデータを基にして、市内のどこが軟弱地盤かというのを、国の防災科学技術研究所と一緒に作りこんだということがあった。そういうマニアックな先生というのがいる。専門家と言うか、そういうものもうまく採り入れると良いと思う。

○ 閉会